史料紹介と研究

中嶋待乳関係古写真調査の概要
―海の見える杜美術館所蔵コレクション―

谷　昭佳

東京大学史料編纂所古写真研究プロジェクト（代表：箱石大）とJSPS科研費一九K〇〇九三四・二三H〇〇六五四（代表：谷昭佳）では、眼前に宮島と瀬戸内海が広がる「海の見える杜美術館」（広島県廿日市市）のご協力を得て、同館所蔵の中嶋待乳関係古写真（以下、中嶋コレクションと称す。）の調査・研究に取り組んでいる。二〇二一年度の予備調査を経て、二〇二二年度から本格的に調査に着手し、これまでに計四回の現地調査を行い、高精細デジタル画像化と目録作成、技法鑑定などを進めている。

本稿では、この間の調査から鮮明となった中嶋コレクションの特徴、判明した新知見の概略、残された課題などを中間報告し、今後のより詳細な研究報告に繋げたい。

一　コレクションの概要

明治中期に東京で活躍した写真師である中嶋待乳（なかじま つち）（本名：中嶋精一（なかしませいいち）、一八四七～一九三八）[1]は、本邦における幻燈（ガラス板上の画像を光学装置により投影して鑑賞）の先駆者として知られているが、一方で写真師としての活動は未だ明確とはなっていない。その一因は、中嶋待乳に関する公開されている一次資料が少ないことにある。そうした現状にあって、ガラス板写真四九点、写真プリント一一点からなる中嶋コレクションは、中嶋待乳の写真師としての様々な活動と人的交流、写真技術者としての技量が実見できる貴重な写真史料群となる。今後の利活用から、新たな知見が得られることが期待されるコレクションである。

1　ガラス板写真について

中嶋コレクションの中核をなすガラス板写真は、一九九九年に海の見える杜美術館に収蔵されたもので、それ以前の伝来は不明である。中嶋待乳には子供がなかったので、妻園の甥である勲（園の末弟である秋尾新六の次男）が中嶋家を継いでいたが、昭和三〇年頃に事業に失敗し、待乳の遺品は散佚した[2]。中嶋コレクションのガラス板写真と、勲の手元にあった遺品類の関連性については、今後の検討課題として残る。

ガラス板写真のサイズは、四五点が概ね四切（一〇×一二インチ）であり、その他の四点が四切以下の異なるサイズとなっている。いずれも主に一九世紀後半に用いられた、ガラスを支持体とする次の三つの技法に分けられる。以下、技法別に説明する。

◎コロジオン湿板写真（ネガ画像、二点）

まず二点のコロジオン湿板写真のうちの一枚**【写真1】**は、中嶋待乳が写真術を教わったとされる師匠横山松三郎（よこやまつさぶろう）（待乳の名は横山が命名したと伝承される）の日光撮影時の姿である。この岩の上に立つ姿と、まったく同じポーズである横山松三郎のステレオ写真の鶏卵紙プリントが、横山家伝来品（個人蔵）に残されている。一眼のカメラとステレオ写真用の二眼カメラを並べて撮影したのであろうか。また、同じく日光での撮影に加わっていた横山弟子の片岡如松の伝来品にも、この時に撮影されたと伝えられるコロジオン湿板写真が現存（個人蔵）する。これらの異なる伝来品の詳細な比較検証をおこなうことで、横山や中嶋らの撮影時の状況をより明らかにすることが可能となるであろう。

もう一枚のコロジオン湿板写真ネガは、若き中嶋待乳の肖像である。特徴的な点として、当時の密着焼き付けによる紙焼きプリント制作時に、人物の肌が綺麗に再現されるように、画像層側から顔全体に入念な修整が加えられている様が観察できることが挙げられる。この二枚のコロジオン湿板写真は、中嶋待乳の写真活動の初期に関係するガラス板写真である。

◎トランスパレンシー（ポジ画像、三点）

次に三点のトランスパレンシーについて述べたい。一枚は、礼装の徳川慶

喜の肖像写真[3]。他の二枚は、礼装の小松宮彰仁親王の上半身【**小松宮A**】と立像の肖像写真である。トランスパレンシーとは、透過光や投影によってポジ画像を鑑賞するガラス板の写真である。その製法は、まずガラス板の写真ネガを用意することからはじまる。そのネガを再度撮影することで拡大や縮小、あるいは未露光の写真原板に密着させて原寸大で焼き付け、別のもう一枚のガラス写真を制作することにより、ネガからポジに反転した画像を得るものである[4]。徳川慶喜と小松宮のガラス写真は、透過光で精細なポジ画像を見ることができる。またガラス面から被写体を見ると、洋装のボタンが鏡に映った姿と同じように、左右が反転した左前となっている。これらの特徴から、先に説明したガラス板の写真ネガの画像層に、新たにガラス写真原板の画像層を密着させて焼き付け制作した、トランスパレンシーと考えられる。よって、画像の解像度は極めて高いポジ画像となっている。このトランスパレンシーこそが、幻燈の第一人者となった中嶋待乳の技術の神髄といえる。

◎ゼラチン乾板（ネガ画像、四四点）

最後に、四四点と最も点数が多く、また中嶋待乳が活躍した時代の一般的技法であるゼラチン乾板について、被写体から大きく分類すると次のようになる。

・皇族や華族を中心とする肖像写真と不明人物写真（二〇枚）

北白川宮能仁親王、北白川親王妃富子、小松宮彰仁親王、山階宮晃親王、徳川慶喜などの皇族華族の肖像写真、一四枚。この内、野外で撮影された北白川宮の写真【**写真2**】は、熊本の写真師である冨重利平が、熊本に赴任した北白川宮を撮影したとされるゼラチン乾板[5]と、同じ場所で同じ時に撮影された一連のものである。実際の撮影者が、熊本の冨重と東京の中嶋のどちらなのかについては、別の第三者の可能性も含めて、ゼラチン乾板に見えている筆を用いた修整技術やカメラ装填時の四隅のガラス抑え痕に注目して、さらに調査を進めているところである。また、高齢の山階宮の写真【**写真3**】に見えている杖は興味深い。この杖は、長年の忠臣への労いの意味から、七八歳の山階宮が明治二七年三月八日に明治天皇から下賜された宮中杖（別名：鳩杖[6]）である。この写真の背景ガラス面に張り込まれている、感光させた黒い鶏卵紙を捲ると、隣に控えていた村雲日榮と思われる人物の姿が現れ、撮影時の状況も知られる。

その他に、人物写真六枚が存在し、これらについての人物比定も今後の課題である。

・日本各地の風景あるいは場景を写した写真（一三枚）

松島・日光・東京・奈良・大阪など各地で撮影された風景写真や、東京株式取引所の場景写真。画像層上に加工されているキャプション表記の仕様や、使用しているカメラ・レンズが様々であることが、これらのゼラチン乾板から読み取れる。よって、実際の撮影者や撮影時期を含めて再検証が必要となる。

・興行関係の写真（六枚）

能や歌舞伎の役者、見世物の生人形など興行に関係する写真。中嶋待乳の妻園が子供の生人形を抱いている写真が別に知られている[7]ことから、これらの生人形の写真も、中嶋写真館製である可能性が高い。

・中嶋待乳と写真館の活動に関する写真（五枚）

呉服町（日本橋）の中嶋写真館の正面外観、明治二九年八月九の日食観測記録写真、中年期頃の中嶋待乳の肖像写真などが含まれている。

2　写真プリントについて

中嶋コレクションには、明治七年に開業した吾妻橋と、明治二七年に日本橋に移転した中嶋写真館の台紙に貼られた写真プリント一一点が所在している。これらは、個別に収集された多様な写真プリントである。人物写真を中心にして、点数は少ないが名刺判から半切までの異なるサイズの写真プリントが含まれている。台紙に見えている日本語とローマ字の表記からは、吾妻橋時代は写真館の別称として「待乳園」を使用し、本名の中嶋精一（なかしませいいち）で活動していたこと。日本橋時代には、写真師・中嶋待乳（なかじままつち）を名乗っていたことなどが判る。

また写真技法としては、鶏卵紙、ＰＯＰ、マットコロジオンＰＯＰ、ゼラチンシルバープリントなどが含まれている。つまり、様々な印画紙が用いら

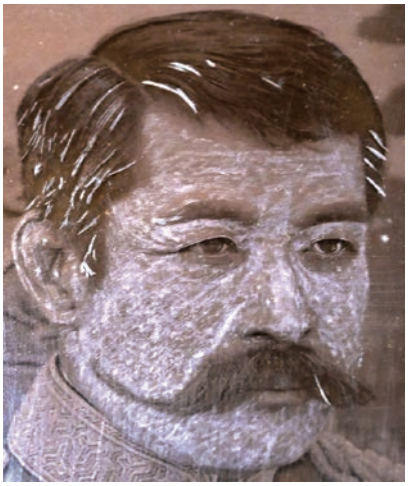

写真１（右上）日光撮影時に岩の上でポーズをとる横山松三郎。
写真２（右下）北白川宮能久親王肖像写真。
（中央上）写真２胸の勲章（左下：勲一等旭日桐花大綬章副章）中央部の赤色七宝に映り込む人影と庭木。
（中央下）写真２顔の白い修整跡（画像層側）。写真を素材に絵画作品を制作する現代美術家ゲルハルト・リヒターと似た筆遣い。
写真３（左上）山階宮晃親王肖像写真。（左下）は、写真３の杖の先端にある鳩の飾り。　**【写真はいずれも、海の見える杜美術館所蔵】**

北白川宮Ａ（右）中嶋写真館撮影と考えられるゼラチン乾板による和装の北白川宮能久親王肖像写真。
小松宮Ａ　（中央）トランスパレンシーによる陸軍正装の小松宮彰仁親王肖像写真。
北白川宮Ｂ（左）写真師中嶋待乳の写真合成による北白川宮能久親王の幻影。
北白川宮は、明治28年に台湾で病死したが、すぐには公表されず、陸軍大将への昇進後にはじめて告示された。実際には身に付けることができなかった勲章を兄である小松宮の写真と合成することで、生前の叙勲であったかのような幻影が、中嶋写真館台紙に貼られた鶏卵紙プリントにより遺された。ローマ皇帝彫像には、皇帝が急死したために、次の皇帝の彫像が即位に間に合わず首だけを付け替えたものがある。古くからあるトリックが明治期の日本でも写真によりおこなわれていた。

れた明治期の写真技法の変遷を網羅しているといっても過言ではない。技法から制作年代をある程度絞り込むことが可能となるため、中嶋写真館製写真プリントの年次比定の指標となることが、今後の顕微鏡撮影画像の利用から期待される。

二　写真修整と加工によるイメージの創出

中島コレクションにおける最も興味深い点に、北白川宮能久親王【**北白川宮A**】と小松宮彰仁親王【**小松宮A**】の二枚のガラス写真と、陸軍の正装に菊花章頸飾と金鵄勲章の副章を着装した北白川宮能久親王の一枚の鶏卵紙プリント【**北白川宮B**】との関連性が挙げられる。

北白川宮は、明治二八年（一八九五）に台湾に出征するが、同年一〇月二八日に台南にて病死した。このことはすぐには公にはされず、病気による帰還とされて遺体は日本に戻った。そして、同年一一月一日の菊花章頸飾と功三級金鵄勲章の叙勲後、さらに一一月四日に陸軍大将へ昇進した後、一一月六日に死去が公表された[8]。よって、授与された菊花章頸飾などの勲章を身に纏って写真撮影し、その後に鶏卵紙プリントを得ることは不可能なはずである。この謎を解く鍵が、先の二枚のガラス写真である。一枚は、和装の北白川宮の**小松宮A**ゼラチン乾板。もう一枚は、陸軍の正装姿の小松宮の**小松宮A**トランスパレンシーである。

まず、**北白川宮A**から見ていこう。特に注目されるのは顔周辺の修整跡である。修整用ニスを下地として塗布した後、画像面から眉や眼、顎などに写真修整液を用いて加筆した様が見えている。さらに首周辺には、ガラス面から墨などを用いて、スポッティング的な手業で修整が施されている。また、ガラスの端には、中嶋写真館を示していると考えられるイニシャル「M.N.」の写し込み標記に続けて、「No 105.」とするネガ番号が手書きで加えられている。この中嶋製と考えられる**北白川宮A**にある首周辺の修整跡は、**北白川宮B**鶏卵紙プリントの首周辺に修整跡として転写されている。よって、この**北白川宮A**が**北白川宮B**の基となっているのは確実である。くわえて、**北白川宮B**の軍服襟と首の境辺りには、最終の仕上げとして、プリント画像層の上に直接加筆した修整跡も見えている。

次に**小松宮A**と**北白川宮B**を検証してみると、身につけている勲章の位置だけでなく、服の皺までもが全く同じであることが判明する。つまり、襟から上の顔画像の部分のみが、早世した弟の北白川宮の顔画像に換えられているのである。よって、前述のトランスパレンシー製法で紹介した、**小松宮A**を制作する前に存在していたと考えられるガラス板ネガ（中嶋クレクションに無し）が、**北白川宮B**の顔から下の部分の基になったと推察できる。しかし、**小松宮A**と**北白川宮B**の間には異なる点がある。それは縮尺である。**小松宮A**のガラス板の画像の方が、**北白川宮B**の鶏卵紙の画像よりも若干大きいのである。このことは、**北白川宮A**の画像と**北白川宮B**の画像の関係上でも同様で、**北白川宮A**の画像の方が**北白川宮B**の画像より若干大きい。鶏卵紙プリントは密着焼き出しにより作製されるため、縮小プリントを作製するためには、ひとまわり小さくしたガラス板ネガを用意する必要がある。

北白川宮A・小松宮A・北白川宮Bの関連性を整理すると、次のようになる。**北白川宮A**と、**小松宮A**の基となったガラス板ネガを用いて、一枚の鶏卵紙上に、首から上と、首から下の二回に分けて焼き付け（それぞれに不要な部分は覆って露光した）をおこなった。その結果として最初に得られた合成画像のプリント（中嶋コレクションに無し）をさらにカメラで縮小複写し、一枚のガラス板ネガを作製した。この一枚のガラス板上に再現された縮小合成画像ネガ（中嶋コレクションに無し）を用いて、最終的に鶏卵紙に密着焼き出しされ、複数枚が制作された内の一枚が**北白川宮B**であると推察できる。実際には身に付けることができなかった勲章を兄である小松宮の写真と合成することで、生前の叙勲であったかのような幻影が写真で残され流布されたと考えられる。写真の政治利用として興味深い事例である[9]。

中嶋コレクションの調査から徐々に際だってきたのは、明治期の人物像が、いったいどのようにして写真から形成されていったのか、その片鱗であ

る。当時の写真材料の組成から、実際よりも肌が荒れる、あるいは黒く再現されることなども影響しているが、それ以上に撮影後の修整は人物の印象を操作するという意味合いも大きかったと考えられる。写真師であり幻燈師でもあった中嶋待乳の知識と技術が活かされる時代でもあったのかもしれない。また工部美術学校画学科で西洋美術を学んだ経験のある妻園の影響[10]なども、中嶋待乳が写真による公人の政治的イメージ形成に関わる要因であったのかもしれない。今後の調査研究から明らかにしていきたい。

註

（1）従来は「中島」と表記されることがほとんどであったが、吾妻橋と日本橋の中嶋写真館の台紙にある標記に合わせて、本稿では「中嶋」と記す。また、吾妻橋時代の台紙裏には、「待乳園」「中嶋精一」の漢字表記があり、ローマ字では「MATSUCHIYEN」「S. NAKASHIMA」の印字がある。よって、これまで定かではなかった「待乳」の読みは「まつち」と同定する。一方、日本橋時代の台紙では、「中嶋待乳」を「M. NAKAJIMA」と記していることから、最終的な写真師としての表記は、中嶋待乳（なかじままつち）とする。

（2）金子一夫「秋尾園と工部美術学校」『近代画説 明治美術学会誌』第二四号、明治美術学会、四～三三頁、二〇一五年。

（3）中嶋待乳は徳川慶喜に写真術を教えたとする説もある。註（2）に同じ、一〇頁。

（4）ベルトラン・ラヴェドリン他二名『写真技法と保存の知識』青幻舎、二〇一七年。

（5）熊本県教育委員会編『冨重写真所資料調査報告書』熊本県文化財調査報告書第一八三集、熊本県教育委員会、一三三～一三四頁、一九九九年。

（6）山階會編『山階宮三代 上』山階會、六九二頁、一九八二年。箱石大氏からのご教示による。

（7）註（2）に同じ、六頁。

（8）佐藤元英監修『北白川宮能久親王』皇族軍人伝記集成第三巻、ゆまに書房、二〇一〇年。

（9）三周忌前の明治三一年九月、北白川宮と御息所の写真が近衛師団の将校に与えられているが、〔北白川宮B〕との関係性は現時点で不明。森林太郎『鷗外全集第三巻』岩波書店、六一四頁、一九七三年。

（10）園の実父が陸軍で図工や写真技術を知り得る立場にあったことが、園の教育にも影響したと考えられる。

〔付記〕本稿を成すにあたり、海の見える杜美術館学芸員の青木隆幸氏、今城誥禧氏には、多岐に渡るご高配を賜りました。記して御礼申し上げます。

史料編纂所「二〇二四年カレンダー」のご案内

このたび、史料編纂所の二〇二四年カレンダーが完成しました。今回は、「貴重書庫に棲む珍獣」をテーマに、本所所蔵の江戸時代の史料に描かれた動物の図を集めてみました。

表紙は『薬材禽獣御吟味被仰出候始終覚書』（宗家史料―四―四一）という、対馬藩が江戸幕府の要求に応えて朝鮮の薬材等を調査した際の記録の控に収録されるハリネズミ（蝟）の図です。このほか、近藤重蔵関係資料、斎藤月岑の日記、間宮林蔵の著作の写本などから選りすぐりの珍獣を取り上げています。写生画や図譜のような美しい動物画ではありませんが、江戸時代の人びとが出会い、史料に留めた珍しい生き物の姿をご覧ください。

取り上げた動物には絶滅種、絶滅危惧種、あるいは生息域を拡大したことで問題を生じさせている動物とみられるものを含んでいます。自然環境をとりまくさまざまな課題についても考えていただく契機になれば幸いです。

体裁はA4判中綴じ（上下見開きで縦A3判）のカラー印刷で、解説二頁を含む一六頁仕立てです。一部五一〇円（税込）にて、東京大学コミュニケーションセンター（史料編纂所の向かい）で販売いたします。

（史料編纂所広報委員　林　晃弘）